

安部氏と半原

徳川家康は、1603年に江戸に幕府を開き、全国を支配しました。そのころは、富岡区全域を下宇利村と言っており、今の中部地区は、葦や榛あし はんの木が生えたさみしい野原だったようです。周辺の小畑、中宇利、黒田、一鍬田、八名井にはそれぞれ村ができており、半原は下宇利村の一部になっていました。

1636年（寛永13年）に領主となった安部氏あんべは、半原に代官役所を置き、以後1871年（明治4年）の廃藩置県まで、代々この地をおさめました。

安部氏は、半原代官役所の周辺を屋敷風に宅地造成しました。富岡中部の字屋敷（横町、上町、中町）の区画は、300年以上前にできていたのです。岡部藩半原陣屋（役所）は富岡字大屋敷におかれ、今は半原藩邸跡の碑が建てられています。役人は、代官二人をふくめて20人ぐらいだったようです。

安部氏の政治は、農民に対して比較的寛大だったようです。そのためか、他の地方にみられるような百姓一揆やききんによる争いの記録はみられません。

最後の藩主となる安部信発のぶおきは、薩長の官軍の動きが活発となった1868年（慶応4年）3月、藩財政の窮乏を口実に半原への移転を願い出て、藩をあげて半原に移ることになりました。江戸藩邸だけでなく、岡部陣屋の藩士の多くも半原に移住することになり、岡部藩の名前も半原藩となりました。

『安部氏とは』

するがのくにあんべだに

安部氏は、駿河国安部谷（静岡県）に住み、代々今川家に仕えていた。その後、徳川家に仕え、戦でしばしば手柄を立てた。その功績を称えられ、家康の姪、多胡姫たこのぶもりが信盛に嫁ぎ、徳川家と安部家は姻戚関係になった。信盛は4千石（後に7千石）をたまわり、領主として、1636年（寛永13年）から1871年（明治4年）の15代藩主信発のぶおきにいたるまでの235年間、この地域を治めた。

安部氏は幕末まで一度の移封もなく、武蔵国（埼玉）の岡部を本拠とした。他にも、摂津（大阪）の桜井谷も領地とし、それぞれに陣屋を設け、代官をおいて政治を行った。2万石の在府大名（城無大名）だったが、領地が3カ所に分かれており、不便だったことと思われる。

それともなつて、藩校だつた学聚館も半原に移転することになりました。とはいつても、明治維新の戦乱のさなかで、100人を超す藩士やその家族が住む家もなく、付近の民家に間借りするなどして、一時しのぎの状態でした。学聚館がくしゅうかんの校舍まではとても手が回る状況ではありませんでしたが、教育のことは1日も遅らせてはならないと、1870年（明治3年）5月2日、陣屋内の一棟を仮校舍とし、学聚館を開きました。大体50人ほどで、ほとんどは藩士の子弟だつたと考えられています。

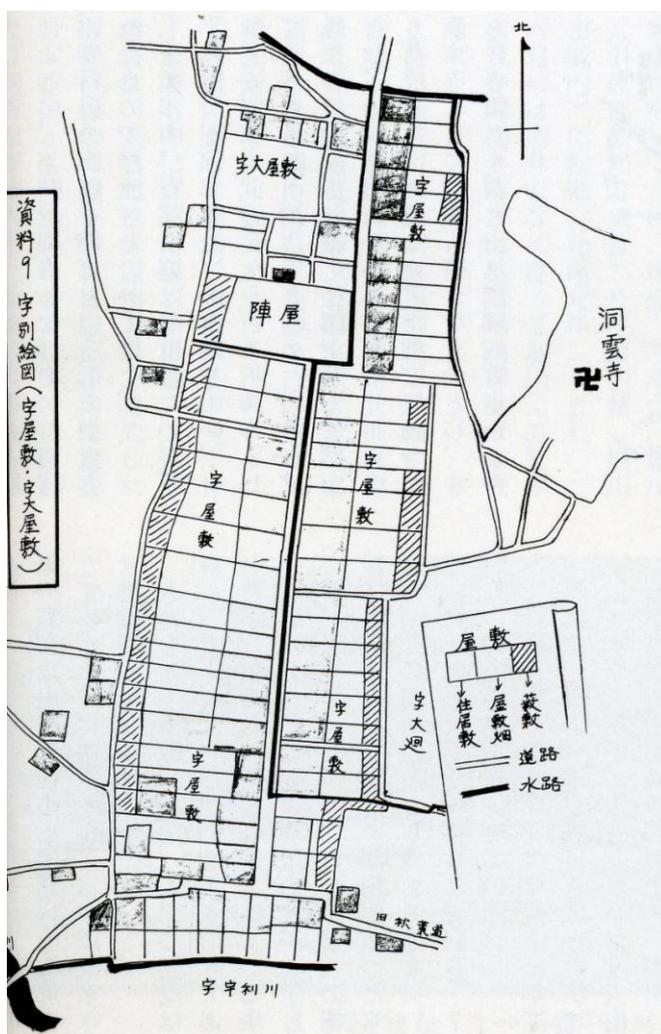
1871年（明治4年）7月、全国一斉に廃藩となり、学聚館も廃校となりました。当時の教科書が八名小学校に保存されており、藩校のレベルの高さがうかがえます。

（中国の論語、孟子、大學等の書物）

廃藩にともない、半原藩知事だつた安部信発のぶおきは東京に帰り、藩士たちも他へ移住し、富岡に残る者はわずかでした。

江戸時代の屋敷配置図

安部氏の半原領地	
寛永13年(1636)のおよその石高)	
中宇利	771石
下宇利	447石
八名井	401石
黒田	385石
庭野	678石
養父	603石
御園	235石
江村	304石
鵜飼島	371石
計	4,202石
※ 一鍛田村は吉田藩領	



かつての士族の方々が建立した「半原藩邸跡碑」。今も子孫の方々の奉仕で管理されている。

郷土105号 本多美佐夫氏の記録より

<参考 八名郡誌, 新城市誌>

安部氏と洞雲寺

洞雲寺は、徳川家康、秀忠、家光の三代の将軍に使えて功績によって、この地の領主となった安部撰津守信盛のぶもりによって建てられました。信盛は、この地方にふさわしい寺院を建て、村人の心を安定させたいと考え、半原村、堀切村、大原村の助けを得て、真言宗の「浄流寺」じょうりゅうじを建てました。

その後、正保2年（1645年）、徳川家光の小姓頭で将来を嘱望されていた信盛の次男、信孝のぶのりが35歳の若さで病死しました。次いで信孝に仕えていた依田源兵衛よだが殉死したことを哀れんだ信盛は、1659年（万治2年）、信孝の法名（大応院殿月峰洞雲大居士）のぶのりから寺名を「洞雲寺」に改め、菩提寺としました。しかし、もともとこの地域の住民は慈廣寺（曹洞宗）の檀家だったため、多数の村民が宗派を変えたり、檀家をやめたりすることが大きな問題となりました。

洞雲寺には、半原藩士族の供養塔をはじめ、「森の石松」の墓、中村メイコさんが建てたお墓もあります。メイコさんの母方の先祖、菊地安兵衛は岡部藩の名だたる重

臣でした。当時の有名な言葉に、「安部にも過ぎたるものが二つある。『菊地安兵衛』と『とび焼の瓶』かめ」と謡われました。

洞雲寺と千葉周作との関係

江戸末期、武蔵国岡部藩の剣術指南番の塚越又右衛門は、北辰一刀流の創始者・千葉周作の実兄である。1868年（慶応4）、岡部藩は半原へ藩庁を移転し、半原藩となった。藩主に従って半原に移転した者は111名（安部家の家臣233名：明治3年）で、周作の甥なりなお成直（2代目又右衛門 明治5年死去）もその一人である。成直はじめ、その縁につながる武士の供養塔が当山に祀られている。



正面が真言宗松陽山洞雲寺本堂
本山は仁和寺

安部氏の飛び地になるまで

天正18年（1590年）豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、全国を統一しました。秀吉は、大名の国替えを断行し、池田輝政が吉田城主となり、東三河（八名郡，設楽郡，宝飯郡，渥美郡の約15万石）を治めることになりました。徳川家康は関東に移封されることにともない、東三河の城主も家康と共に関東に移ることになりました。そのため、八名の地は、吉田城の池田輝政の支配に置かれました。

<関東への移封先とその後>

徳川家康	浜松城	→	江戸城	250万石	
奥平信昌	新城	→	上野国 <small>こうずけのくに</small> （群馬）小幡	3万石	⇒ 美濃加納藩（10万石）
菅沼定盈	野田城	→	上野国阿保 <small>こうずけのくに あぼ</small>	（1万石）	⇒ 伊勢長島（2万石）

- 1600年（慶長5年） 関ヶ原の戦いで家康が勝利、豊臣方領地の没収、削減。池田輝政は姫路城に移り、東三河は天領となる。
- 1601年（慶長6年） 松平家清いえきよが吉田城主となり（3万石）、一鉄田，小畑が吉田領となった。
- 1603年（慶長8年） 家康が江戸幕府を開き、征夷大將軍となる。
- 1605年（慶長10年） 秀忠に將軍職を譲る
- 1615年（元和元年） 大阪城陥落（夏の陣）豊臣家滅亡 翌年家康が死去
- 1623年（元和9年） 家光が將軍となる
- 1635年（寛永12年） 参勤交代を義務づけられ、幕藩体制が強固となる
- 1636年（寛永13年） 岡部藩の旗本 安部信盛 三河国で4千石加増される。**
(八名郡=中宇利, 下宇利, 八名井, 御園, 養父 宝飯郡=江村, 鵜飼島)
- 1668年（寛文8年） 安部摂津守 3千石加増される
(小畑, 黒田, 庭野, 塩沢, 鳥原, 賀茂)

<当時の東三河の領地支配>

- ・吉田城主 （一鉄田，小畑の一部，上吉田，竹ノ輪等）
- ・安部摂津守 11か村
- ・菅沼越中守（下吉田，上吉田の一部）
- ・天領 （吉川，黄柳，多利野，乗本，大野，下平，六郎貝津，細川，井代，能登瀬，名越，一色，巢山の14か村）天領は名誉なこととされた

<参考 八名郡誌，新城市誌>

安部氏について

諏訪郡の出で、南北朝時代に諏訪神党として南朝方で戦ったが敗れ各地に散ったとされています。安部氏の祖は駿河国安部谷（静岡）に住み、安部氏を名乗りました。戦国時代は今川氏に属しましたが今川滅亡後、武田につく者の夜討ちにあい、家康につきしました。そして、家康の東遠州進出に貢献しました。安部を名字としたが、伊賀の安部氏と呼び分けるために安部としたようです。安部家は、全国でも珍しく一度の移封もなく幕末まで続き、岡部を藩の本拠としました。

- 初代 元真 もとざね 1567年（永禄11）家康に従う
- 2代 信勝 小牧・長久手の戦いで功あり。家康に従い関東へ
1590年（天正18）上野で5250石を受領（武州岡部：埼玉）
- 3代 信盛 のぶもり 二条城番，大阪城代を勤めた功あり
1636年（寛永13）八名郡の地4千石加増される
1649年（慶安2）摂津で1万石加増され大名格となり岡部藩をおこす。定府大名（城なし大名で江戸に定詰）
妻は家康の姪 嫁ぐ際、越後小千谷で8万石を多胡姫の化粧料として賜ることになったが、此を断ったという話がある
人心をまとめるため、真言宗の浄流寺じょうりゅうじを建立
次男、信孝のぶのりの死を哀れみ、洞雲寺に改める
- 4代 信之 のぶゆき 1662年（寛文2）相続 1668年（寛文8）三河で3千石加増
- 5代 信友 のぶとも 1678年（延宝6）相続
- 6代 信峯 のぶみね 1701年（元禄14）相続
1705年（宝永2）安部氏居所を岡部に定める
- 7代 信賢 のぶかた 1706年（宝永3）相続
- 8代 信平 のぶひら 1723年（享保8）相続
- 9代 信允 のぶちか 1750年（寛延3）相続
- 10代 信亨 のぶみち 1782年（天明2）相続
- 11代 信操 のぶもち 1806年（文化3）相続
- 12代 信任 のぶより 1825年（文政8）相続
- 13代 信古 のぶひさ 1828年（文政11）相続
- 14代 信宝 のぶたか 1842年（天宝13）相続
- 15代 信発 のぶおき 1863年（文久3）相続
1868年（慶応4）岡部から半原に移り **半原藩と改称**
1871年（明治4）廃藩置県 半原藩知事免官

<安部領5か国>	※陣屋
※・三河半原	8千石
・丹波	2千石
※・摂津桜井谷（大阪）	7千石
※・武蔵国岡部（埼玉）	4千3百石
・上野	870石
合計	2万252石
陣屋に代官を置き，少人数で行政	

安部氏の政治



民政がうまいと評価されています。そのため安部氏による明治までの統治時代に、一度も大きな訴えや願い出が起こりませんでした。

安部氏の家紋
 祖が諏訪神党に属していたため、諏訪明神の神紋である「桐の葉」に由来して「丸に桐の葉」となっている。
 富岡小学校の校章は、桐の葉に富を加えたもので、現在はふるさと会館の玄関に

<他藩にない特徴>

- ① 信盛は地方をよく知る者に託すため人物をさがした。宇利の近藤石見守いわみのかみと幕府代官、米倉平太夫へいだゆうが黄柳野村の手塚伝右衛門つげの でんえもんを推挙し、代官となった。
- ② 村々に庄屋組頭百姓代を置き、5人組を立て、自治的に治める。
- ③ 租税の取り立てでは、庄屋組頭に給料を与え、猪鹿威玉薬料を出した。
- ④ 村の有力者に官民の調整役をさせた。
 - ・下宇利村 浅見与兵衛 代々苗字帯刀を許し、御領分取締を命じた。
 - ・黒田村 浅井三左衛門 同上

寛永年中（1624～1643）と安永4年（1775）の石高				
(八名村)	寛永年中	安永4年（1775）		明治5年(1872)
・小畑	1 8 9石	8 6石	11戸 45人	4 4戸
・中宇利	7 7 2石	9 1 8石	145戸 587人	1 2 6戸
・下宇利	4 2 2石	—	—	8 5戸
・半原	—	4 5 4石	125戸 522人	2 0 9戸
・黒田	4 7 7石	5 6 9石	87戸 366人	1 0 2戸
・庭野	6 3 0石	—	—	1 3 3戸
・一鍬田	3 3 9石	—	—	6 3 7戸
・八名井	3 8 2石	—	—	7 9戸
※ 半原は下宇利村の新田であり、寛永、慶安、寛文の頃(1673)には、まだ村ができていなかった。				
(金沢村)				
・御園	2 2 9石	—	—	5 7戸
・養父	5 7 9石	—	—	1 2 1戸
(賀茂村)				
・賀茂	1 7 8 8石	—	—	2 8 9戸

<新城市誌より>

維新前後の安部氏

1867年（慶応3年）王政復古の号令

1868年（慶応4年＝明治元年）

- 1月 3日 鳥羽伏見の戦い
- 2月16日 勤王の証書，帰順を請う（信発，新政府軍に従う）
- 3月11日 岡部陣屋へ岩倉より官軍の兵食の加勢を命じられる
- 3月29日 三河半原へ移転出願（不都合の理由）
幕府側の兵との衝突を避けるため，体よく逃げ出す？
- 4月 3日 信発，藩の半原への移転を実行。半原藩の成立
- 4月 4日 東海道川崎関門の守備を命じられる
鈴木伝を隊長，兵85人を出す。
- 4月15日 徳川慶喜 江戸城を開城する
彰義隊討伐 会津の乱平定

<半原への移転>

藩主の安部信発も半原へ移ったが住む家がなく，代官の役宅を仮宅にあて，士族たちは民家を借りて仮の住まいとする有様だった。

半原へは200人あまりが移った。士族の屋敷が急に100軒近く増え，一時はにぎやかだった。

<半原藩>

- ・所領 2万2千石
- ・人口 1万5680人
- ・領主 1軒 3人
- ・士族 170軒 578人
- ・卒 74軒 155人

<半原に移転した者>

- ・領主外士分 85軒
- ・士分以下 11軒
- ・卒 15軒

その他は東京，岡部，摂津に分居

明治2年に藩士が士族と卒に分けられた

半原で，役所，住宅の造営の設計をしたが，できないうちに廃藩となった。廃藩置県後の武士の多くは失業状態となった。

1869年（明治2年）6月23日 安部信発 半原藩知事に任じられる。

1871年（明治4年）7月15日 廃藩置県 半原藩知事の免官

当面，所領はそのままで半原県と名づけられた

11月15日 岡崎に額田県を置く

三河8郡と知多郡が管轄となる

<以上の参考文献> 八名郡誌，新城市誌，安部家譜，愛知県史
(文責：八名郷土会)